

国語(現代文)

▲文(日本文・中国文・外国語文化・哲)・神道文化・法・経済・人間開発・観光まちづくり学部▼

【現代文】

1

出典

I 穂村弘「通販で5万円のダイヤモンドやばくて惹かれる駄目感」(『朝日新聞』二〇二三年四月六日朝刊〈言葉季評〉)

II 山極寿一「人類はどこで間違えたのか―共感力と技術賢い使い方」(『朝日新聞』二〇二三年三月九日朝刊〈科学季評〉)

解答

問一 (1)ーカ (2)ーイ (3)ーキ (4)ーエ (5)ーコ

問二 エ

問三 Bーア Cーウ Dーオ

問四 ウ

問五 ア

問六 ア

問七 オ
問八 イ

解説

問一 (1) 「デパートとか専門店とかで買うもの」という条件をあとから付ける用法。

(2) 疑問の「のか」と呼応。

(3) 「危うさ」に気づいているという原因から「だめ」と判断する結果につながる。

(4) 〴〵まず第一に、最初〴〵の意味。

(5) 「人生の大失敗でも致命傷でもない」と「すべてを棒に振りそうな危うさの芽が潜んでいる」は対立する内容で
逆接の言葉が入る。

問二 次から次へと続けざまに質問している様子を表す言葉が入る。

問三 B、「定住と所有という農耕・牧畜社会の原則」が「支配階層や君主を生み出し大規模な戦争」を生み出す元にな
ったという流れ。「温床」は〴〵よくない物事が起こりやすい状況〴〵のこと。

C、「集団間の争い」が頻発する状況を表す言葉が入る。「下剋上」は〴〵下位のものが上位のものをしのいで力をもつ
こと〴〵だが、この場合は秩序が乱れている世の中の状態を表現している。

D、「自然の時間」と対比となるような語が入る。

問四 「飲む打つ買う」は〴〵大酒を飲み、博打を打ち、女性を買う〴〵ことであり、道徳的に良くない男性の道楽を並べた
言葉である。

問五 傍線部前後の言葉の登場に関する部分を確認する。傍線部の「言葉によって世界を切り分け」は、世界を分節化し
て言葉を当てはめて理解すること。それによって人間は「因果関係」などの論理を語ることができるようになり、
「環境を対象化して世界を支配するようになった」とある。イ、「日常言語の機能の中に……新たな働き」を、ではな

く言語そのものの創出の話である。ウ、「自分たちの過去を記憶し、未来を予測する能力」では「因果関係」を語れることにはならない。エ・オ、同じく「因果関係」で解釈することを説明できていない。

問六

最後の四段落で短歌から読み取れることがまとめられている。「一見小さなダメージの中に、すべてを棒に振りそうな危うさの芽が潜んで」おり、「自分というものを見失っている」ことがポイントであり、「本当にやりたいこと、やるべきことから、無限に遠いところで今を生きている」ことが「だめ」で「まずい状態」である。最終段落で「ちよつとした振る舞いの、小さなダメージの中に、底抜けの無益さが表現されている」とまとめられている。オは「小さなダメージが徐々に蓄積され」が誤り。生き方の危うさがそれぞれの「小さなダメージ」の中に表現されているのである。

問七

最終段落で「間違えた道筋」と表現されるまでに人類の誤った進化の過程が説明されている。第二段落の「共感力」は最終段落で必要と語られており、否定されるものではない。間違いの発端は第三段落の「言葉が登場」したことであり、言葉によって環境を対象化して世界を支配するという人間中心の世界観をもったことである。第四段落は集団間での争いの頻発、第五段落で支配層による団結の仕組みが戦争の基本的な考え方となったこと、第六段落に産業革命から人びとの物欲が高まり、他国の略奪や植民地主義、差別を生み出していったことが語られている。これらすべてに触れているオが正解である。

問八

問六で確認した通り、日常のふとした行動から「自分というものを見失っている」自分を「だめ」と自覚するのである。その危うさが問題文Ⅱで語られる「間違えた道筋」（問七で確認）とリンクするものとするならば、それに対して問題文Ⅱの最終段落で「ひたすら前を向いて生きてきた」人類が「間違いを認め」、「管理された時間から心身を解放し、自然の時間に沿った暮らしをデザインする」という解決策が示される。

真木悠介『時間の比較社会学』〈第二章 古代日本の時間意識 三 世間の時間と実存の時間〉（岩波現代文庫）

解答

- 問一 (1)ーア (2)ーオ (3)ーウ (4)ーイ (5)ーエ (6)ーア
問二 ウ

問三 エ

問四 イ

問五 オ

問六 エ

問七 ア

問八 ウ

問九 イ

問十 エ

解説

問三 傍線部前に「上代の人びと」は「稲」「花」という自然の姿から季節を感じたと説明されている。一方、傍線部「（こゝ）」（（古今集））では逆に、「季節をまず観念的に決定（（自然の季節を先に暦として実際の自然の変化とは別に設定））」し、これが「眼前にあるものごとこの意味を規定する（（自然の実際の変化を推定する））」と傍線部後に説明されている。

問四 傍線部の「対象化」は具体的世界から離れた客観的な存在としたこと、「主体化」は何かを決定するものとしたことをいう。傍線部前に「観念の時間（（具体的な自然からは独立して客観的に設定された暦））」がぎやくに、眼前にあるものごとこの意味を規定する主体（実体とされる）とある。ア・ウ・オ、いずれも「眼前にあるものごとこの意味を規

定する」という「主体化」に触れられていない。エ、「擬人化」はされていない。

問五 傍線部前の三首の前に、「生の手ざわりの喪失」「今ある生の内的な意味の減圧」、「古今集における言語空間の自立、あるいはその自然性からの疎外」と古今集の和歌の説明がある。問四で見た「時間」同様、「恋愛」も実際の感情から離れ、客観的、観念的なものとなっているということである。イ・ウのような「素朴で生々しい感情」や「初々しい新鮮な感覚」はむしろ万葉集の歌に見られる特徴である。

問六 空欄の前の二首は「春ごとに」咲く花、「秋の菊」が美しく咲く間は、と季節がめぐりくることを示しつつ、後半ではまた見るかどうかは命しだいだ、花より先に死ぬかもしれない自分、と対比している。二首の前に述べられている「世界の恒常性、時間の可逆性」は、歌の前半部分のように季節はめぐり、自然は変わらず存在しもとに戻ることを指す。古今集ではこの感覚から人間の意識が乖離しているとされている。「一回性」は一度きりで二度ともとは戻らない様子（不可逆性）を表した言葉である。

問七 傍線部は「栄枯盛衰」（無常）が人の意志によって決定される感覚が強まったということであり、直前に挙げられた「かの方に」の和歌にもそれが現れている。それは和歌の後に「官僚制の成熟」と「都城の生活」の中、生活基盤が「対自然的な生産活動」「氏族共同体との紐帯」から離れ（＝自然なありようから乖離し）、「ソフィステイケート」された権力争いのうえにおかれていた」ことに原因があると述べられている。「ソフィステイケート」は小町の歌四首の紹介の後で「非・自然化」の意味とわかる。つまり人為化である。

問八 空欄を含む文の冒頭に「それ」とあるので、前段落に着目すると、「業平」について「抽象的に……ではなくて、それよりは具体的なかたちで」「より具体的な身体の運命の不可避性」とある。空欄前の「初期古代人の感覚」は「身体的・対他的」なものである。傍線部(f)の段落はじめの「古代社会におけるそれが、すぐれて身体的・対他関係的な具体性を喪わないものであった」からも、「具体性」が入るとわかる。

問九 和歌の前半は、花の色はうつろってしまつたなあ、後半は、むなしく私自身が年を重ねながら物思いにふけて

3

出典

池田晶子『暮らしの哲学』〈秋 Fall 悩ましき虫の音 秋の夜〉(毎日新聞出版)

解答

問一 (1)ーイ (2)ーウ

問二 エ

問三 イ

問四 オ

問五 エ

問六 エ

問七 イ・カ

いる間に〴〵の意味。よって「もの思いに沈澱する」のは「わが身」である。それに対して「花の色」は自分自身以外の「他」である。「世間」で問題ないだろう。ア、「わが身」については「実存」ともいえるかもしれないが、「花の色」を「個我」とするのは不適切である。

問十 傍線部は「〈時間の恐怖〉をのりこえる様式」が「身を隠すこと」に見出されたことを理解できるとする。これはこの段落の初めに「〈実存の時間〉の意識……が、すぐれて身体的・対他関係的な具体性を喪わないものであったとすれば」のことである。また、「〈時間の恐怖〉」については、業平の「濡れつつぞ」の和歌の後の段落で「自己の未来に向けられた時間意識の恐怖としての老いと死の心像(＝イメージ)」とあり、これは小町の「花の色は」の和歌の後にも「実存の時間の感覚」「実存の時間恐怖」として共通して指摘されている。

解説

問二 「妙趣」は〴〵すぐれた趣、すばらしい味わい〴〵の意味。この場合「妙」は〴〵不思議だ、奇妙だ〴〵の意味ではない。

その具体的な内容は傍線部前に述べられている。「夜気がひんやりと肌に滲み」、「彼らの声（≡虫の声）」が「心に秘めやかに沁み」、聴いていると「自分が虫の音となって鳴っているような感じになる」とある。アは「わが身」が「虫の音」になるという説明ができていない。イ・ウ・オは「妙趣」の意味が誤りである。

問三 「それ」は傍線部直前の「虫の音を聴き、星空を眺めているところの私（≡星や虫を感じている私）」が、「虫の音となり星空となる」（≡感じる対象と一体化すること）を指す。「逆転の構図」は主体と客体が入れ替わっていることを指す。ア、「逆転」に言及していない。ウ、「逆説」とは、一見真理ではないように見えて実は真理を述べている説のことであり、この場合は当てはまらない。エ、星空と虫は同等に並べられていて「対比」はされていない。オ、「しばしば起こっている」ことは傍線部前の指示内容には入っていない。

問四 傍線部の次の段落の初めに「この言語化、科学的説明が正しいとしても、音を聴くというこの経験そのものの何であるか（≡経験そのものの意味）を言っていることになりません」とある。ア、「自分の頭の中で音楽が生まれる」が、「音楽が鳴っている……経験」の説明として不適切。イ、「音楽を聴く私の存在のありか」、ウ、「音になる人の心の状態そのもの」は前述の「音を聴くというこの経験そのものの何であるか」という記述とずれる。エ、「科学的説明」としては正しいのだから、「一面さえも」は言い過ぎである。

問五 傍線部の「言語」とは、具体的には「一体化した」「一体感が生じた」という表現を指す。傍線部後に、「『私はそれであった』『私はそれとして存在した』と言うべき」とある。なぜなら、「『一体化』と言う限り、主客の分裂が認められていることにな」るからだと続く。「主客」は知覚の主体と対象のこと。そして前段落に「この（主客二元の）世界観は、我々の経験を、自ずから瘦せたものに」するとある。これは、自分が「星空として存在している」ということを言語が表現できていないということであって、ウのように「事態の把握」ができないということではない。

問六 傍線部前に「世界とは、私によって見られている以外のものではあり得ない」（≡世界とは私が見ているものだ）とあり、傍線部直前には「全宇宙を見抜き見晴らすことができるこの眼は、しかし、見ているこの眼だけは見ること

ができない」と続く。私の「眼」は「全宇宙（＝全世界）を見抜き見晴らす」ものであって、イの「私が見ることを通じて知り得ること全ては世界内の存在である」は表現がずれている。オ、「全宇宙を見晴らす」ことは「世界と一体化したとき」に限らない。

問七

ア、「主語述語の世界観」を受け入れても、「何かに没入」できなくなるわけではない。イ、傍線部(d)の前段落に「科学的説明が……、この純粹経験の不思議さを忘れる」とある。ウ、「主客の転倒の構図」は、冒頭の「虫の音となつて鳴っている」経験から「自然と」感じられるものではなく、「虫の夜の」の句を読んで感じるものである。エ、「私」は「知覚の対象」ではなく主体である。オ、「地球かな」という言葉によって、最後から四段落目に「地上に存在していた」私を「宇宙から」見たと感じ、その次の段落で「地上の私を見ているこの眼もまた必ず私なのだ」と考える。知覚するのはあくまで「私」であり、選択肢の「更なる逆転」は不適當である。カ、虫の音や星空となった経験について、傍線部(d)の段落で「ある対象に感動して、『我を忘れた』経験」、その前段落で「純粹経験」と表現されている。そして最後から三段落目以降、「地球かな」の結句から「地上の私を見ている」「全宇宙を見抜き見晴らす」眼を感じ、「私とは何か」という問いにまで発展するさまが述べられる。